**「スワーミー・プレーマーナンダ」**

2023年10月15日

逗子例会

スワーミー・ディッヴィヤーナターナンダによる講話

於・逗子協会

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダはかつてシュリー・ラーマクリシュナについて、彼は「神聖なる愛（プレーマー）」の権化であると述べました。シュリー・ラーマクリシュナの出家直弟子のそれぞれに、師の特徴が何らかの形であらわれていましたが、師の神聖な愛という側面は、スワーミー・プレーマーナンダにあらわれていました。スワーミー・プレーマーナンダがマハー・サマーディ（入滅）に入った後、『ラーマクリシュナの福音』の著者マヘンドラナート・グプタ（Mさん）は、「シュリー・ラーマクリシュナの『神聖な愛』という側面が、神聖な僧団から去りました」とコメントしたほどです。

初期

プレーマーナンダジーは、コルカタから約30マイル離れたアントプールという村で生まれました。彼の僧侶になる前の名前はバーブラーム・ゴーシュでした。彼の母親であるマタンギニ・デーヴィーもシュリー・ラーマクリシュナに会うという幸運に恵まれ、後には近しい信者の一人になりました。彼は若い頃から霊的生活に興味を示しました。先輩の僧侶と一緒に人里離れた場所に滞在し、質素で禁欲的な生活を送りながら霊的修行を行うことをよく夢見ました。

シュリー・ラーマクリシュナの御前で

バーブラームは村の小学校を卒業した後、高等教育を受けるためにコルカタに行き、Mさんが校長を務めるメトロポリタン・インスティテューションに入学しました。そこで彼はラカル（のちのスワーミー・ブラフマーナンダ）と出会い、親友になりました。当時ラカルはすでにシュリー・ラーマクリシュナのもとに通い始めていました。会話の中でラカルが師について話すと、バーブラームは是非ドッキネッショルに行ってみたいと言いました。

ラカルとバーブラームがドッキネッショルに到着すると、シュリー・ラーマクリシュナは二人をとても歓迎し、そこで一夜を過ごすことを許可しました。師は、新訪問者によくするように、（手の重さを測るなど）体のさまざまな部位をチェックして、良い兆候を見つけて満足しました。ちなみに、ドッキネッショルという場所は、バーブラームの少年時代の夢に出てきた場所に似ていたので、心の中で密かに憧れていた場所にたどり着いたことに驚いたそうです。バーブラームはドッキネッショルから戻った後、頻繁に師を訪ね、徐々に他の信者たちにも紹介されるようになりました。

次第に、彼の師とのつながりは今生だけのものではなく、もっと深いつながりがあることが分かるようになりました。シュリー・ラーマクリシュナも彼を内輪の弟子と認めました。シュリー・ラーマクリシュナは非常に純粋だったので、不純な人に触れることができませんでしたが、恍惚の状態の時にもバーブラームには触れることを許可しました。師はよく「バーブラームは骨の髄まで純粋だよ。どんな不純な考えも、彼の心をよぎることはない」と言いました。師との緊密な関係はバーブラームの心に偉大なヴァイラーギャ（放棄）をもたらし、彼の勉強への興味は失われました。バーブラームは大学の入学試験を受けましたが、合格できませんでした。しかしながら、シュリー・ラーマクリシュナは、その知らせを聞いて喜びました。なぜなら、試験や免状がしばしば人を縛る足かせになるとみなしていたからです。

シュリー・ラーマクリシュナはよくバーブラームを「ダラディ（魂の友）」と呼びました。初期に、シュリー・ラーマクリシュナがバーブラームの母マタンギーニに「私の側にあなたの息子を残しっていってくれ」と願うと、マタンギーニハは快く承諾しました。彼女は「子供との死別という悲しみを味わうまで生き永らえることがありませんように」と祈り、シュリー・ラーマクリシュナは彼女の祈りを聞き入れました。

兄弟僧として

シュリー・ラーマクリシュナのマハー・サマーディ（入滅）の後、バーブラームは世を捨ててボラノゴル僧院に滞在し始めた若者のグループに加わりました。ある十二月、バーブラームの母親がアントプールに若者たちを招待しました。ボラノゴル僧院にあつまった若者たちは全員列車に乗り、賛歌を歌いながらアントプールに行きました。アントプール滞在中のある寒い夜、若者たちは中庭で焚火を興し、そこに集まって瞑想しました。ナレンドラは、主イエスの話を始めました。放棄について説いたのです。それに鼓舞された彼らはそのドゥニの火の前でサンニャーサの誓いを立てる（僧衣をまとう）決心をしました。後に彼らは、それがクリスマス・イブであったことを知りました。サンニャーサの誓いを立てた後、バーブラームはスワーミー・プレーマーナンダになりました。

他の直弟子同様、バーブラーム・マハーラージも巡礼地を数か所訪れ、激しい霊的実践を行いました。スワーミー・ラーマクリシュナーナンダがスワーミージー（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）の要請でチェンナイで教えを説くために旅立つと、スワーミー・プレーマーナンダはシュリー・ラーマクリシュナの礼拝を行うという役割を引き継ぎました。ある日、スワーミージーはプレーマーナンダジーを呼んでこう言いました「あなたは今まで写真の中のシュリー・ラーマクリシュナを崇拝していましたが、これからは人間の中に生きている神にも仕えてください。近隣へ出かけて行き、病人や苦しんでいる人たちに奉仕してください」。そこでスワーミー・プレーマーナンダは兄弟弟子の命に従って村へ行き、非常に貧しく衛生状態の悪い少年らをベルル・マトに連れてきて石鹸を使って沐浴させ、きちんとした食事を与え、その後、家に送り返すことなどをしました。

スワーミージーが肉体を離れる３日前のことです、スワーミージーはベルル・マトの敷地内を散歩し、ある場所を指差して、「私が死んだらここに火葬してください」と言いました。亡くなる日、スワーミージーはスワーミー・プレーマーナンダと共に朝食と昼食をとり、とても陽気な気分でさまざまな話をしました。彼はまた、ベルル・マトでヴェーダ・ヴィッディヤーラヤ（ヴェーダの勉強をする学校）を始めるという自分の考えをスワーミー・プレーマーナンダに伝えました。スワーミージーは彼に二つの指示を与えました。第一に、直弟子をとらないこと。第二に、ベルル・マトの諸事の管理をすることです。スワーミー・ブラフマーナンダが僧長だったとき、彼は発展を始めている各支部を調査するために数か月間ベルル・マトを離れることがありました。そんな時、スワーミー・プレーマーナンダがベルル・マトの諸事を管理しました。

スワーミー・プレーマーナンダは、祭殿でのシュリー・ラーマクリシュナへの毎日の儀式的礼拝、台所と食堂の世話、信者の毎日の食事、菜園の手入れなどをしました。また若い新人見習い僧を指導し教えました。実際、家庭のぬくもりから離れ、放棄の生活を始めた新人見習い僧の生活を築くことが、彼の大事な仕事の一つになりました。

僧団の母

スワーミー・プレーマーナンダのハートは、ベルル・マトの運営中に完全に花開きました。彼は真の愛（プレーマー）の権化となったのです。スワーミージーが説く「燃えるような無私の愛」がスワーミー・プレーマーナンダの人格に完全にあらわれました。何百人もの世俗の人びとが彼の愛に触れて信者になりました。彼の愛に惹かれて、何人かの若者がベルル・マトを訪れ、彼の口からシュリー・ラーマクリシュナについての話を聞きました。彼らの多くは、プレーマーナンダジーの深い愛と心を打つ放棄の言葉に感動して、あたたかい家庭を離れ、僧侶として僧団に加わりました。プレーマーナンダジーもまた、あらゆる方法で若者たちの生活を形作るために熱心に働きました。話し方、歩き方、野菜の切り方、祭殿の掃除、牛の世話、食事の配膳などのすべてを彼が教えました。彼はよく言いました。「中庭のとげのある茂みを取り除いてください。師（シュリー・ラーマクリシュナ）が中庭を散歩なさるときにけがをしてはいけないので」「キンマの葉を巻くときは、ライムを入れすぎないでください。師の舌が火傷してしまいますから」「礼拝用の白檀のペーストを作るとき、ざらざらした粗い粒子を入れないように」「師は温かい食べ物がお好きだったので、冷たい食べ物を供えないでください」「夜に蚊帳を張った後に、師の御足を心でマッサージしてください」「もし師が夜中に目覚めたら水を所望されるかもしれませんので、師のベッドの近くにコップ一杯の水を置いてください」。このようにして、プレーマーナンダジーは新人見習い僧たちに、あらゆる活動をシュリー・ ラーマクリシュナへの礼拝に結び付けるように教えました。

彼はとても愛情深い人でしたが、時には厳しくもありました。ある時、一人の新人見習い僧が牛の飼料を切っているとき、不注意で指を切ってしまいました。彼の手からは血がにじみ出始めました。たまたまプレーマーナンダジーはさまざまな部門の世話をした後に僧団を散歩しているときでした。彼が牛舎に近づいたときにその出来事を見て、慰めるどころか「飼料を切るように頼みました。指ではありません。君はとても不注意だね…」などと叱り始めました。それからその新人見習い僧を治療のために医務室に連れて行きました。

プレーマーナンダジーは公平な方でした。新人見習い僧の生活のあらゆる面において、平等に注意を払いました。彼は「（仕事、瞑想、学習などを）総合的に進めてください」と強調しました。彼はある時、庭仕事ばかりしている見習い僧を見て、「君は肉体労働をするためにここへ来たのかね」と即座に叱責しました。見習い僧が「私はサンスクリット語がよくわかりません」と答えると、プレーマーナンダジーはすぐにサンスクリット語の教科書を手配して、3か月以内にその本を読み終えるように指示しました。

プレーマーナンダジーは、シュリー・ラーマクリシュナが述べた三つのランクのお医者さんのうちの最高のランクのお医者さんでした。彼は新人見習い僧に、時には優しい言葉で、時には厳しく、時には愛をもって、時には厳しい叱責によって、時には耳をつまんででも彼らに教えました。しかし、叱った相手に対しては、余分に料理を出してくれることもよくありました。ですので、彼に叱られることはある意味、特権でした。新人見習い僧たちはプレーマーナンダジーの叱責や批判はすべて自分たちを高めるためであることをはっきりと理解していたので、プレーマーナンダジーの愛情深い御足に委ねました。プレーマーナンダジーも愛情深い母親のように、若者たちに対する責任を負いました。プレーマーナンダジーは、「信者への奉仕と神への奉仕に差異はありません」と教え、自らが行動で示しました。この精神に基づいて、彼のもとに来る誰とも行動を共にしました。彼の愛の流れによって世界は彼自身になりました。

当時、僧団には数人の若者が来ていましたが、中には昼食後や夕食後など、変な時間に来る人もいました。担当者が台所を掃除し終えて休憩している午後遅くに数人の信者が現れることがよくありました。そんな時は、バーブラーム・マハーラージ自身が料理を始めました。時々、彼は自分の食事を譲り、ご自身は空腹のままということもありました。 ある時、南インドから来た信者が２階のベランダで眠ってしまいました。プレーマーナンダジーはこれを見て、蚊帳を張り、扇ぎ始めました。ある裕福な家庭の若い信者（後に僧侶となった）がベルル・マトに来て、夜に泊まることがよくありました。プレーマーナンダジーは見習い僧に、毛布の代わりに柔らかい掛布団を用意するように頼みました。インドの毛布はざらざらしているので、育ちの良いその信者が不快に感じるかもしれなかったからです。彼はとても深い洞察力を持っていました。実際、プレーマーナンダジーは、非常に真心を込めて信者に奉仕していました。ある時、外で雨が降っていたので、信者たちの靴が濡れていました。一人の見習い僧が信者たちの靴を、足で中に取り入れていました。プレーマーナンダジーはこれを見て、「そんなことをしてはいけないよ。手で靴を高くかかげて運びなさい！」と言いました。バーブラーム・マハーラージの愛ある奉仕は、ベルル・マトの中だけにとどまらず、穀物や野菜などの食料を近くの家に配る姿がよく見られました。

当時、インドはイギリスの統治下にありました。独立運動に参加していた若者の中にも正式に僧院に入る者がいました。そのことから、政府はベルル・マトを監視し続けました。あるとき、上層部の指示を受けた私服の警察のスパイが僧団にやって来ました。暑い夏の日だったので、警察官は汗をかき、疲れ果ててベンチに座って休んでいました。するとどこからか僧侶がやって来て、彼を扇ぎ始め、コップ一杯の水を差し出しました。それは他でもないバーブラーム・マハーラージでした。

かつてある青年が若さの絶頂期に悪の仲間の影響でどんどん悪の道に迷い込みました。幸いなことに、彼は友人の一人を通じてプレーマーナンダジーと接することができました。プレーマーナンダジーは彼の悪行を知っていましたが、少しも厄介者扱いをしませんでした。それよりはいつもどおりに、とても愛情を込めて話しかけました。さて、この若者は、自分の倫理観の欠如のせいで、周囲のほとんどの人、最も親しい人たちさえもが、自分の仲間を避けて自分を見下していると感じていました。しかし、ここに自分の過去の行いを知りながらも、たくさんの愛を示した人がいました。バーブラーム・マハーラージの愛が純粋で無私であることを彼が理解するのに、それほど時間はかかりませんでした。マハーラージは彼の性質に関係なく彼を愛しました。聖なる交わりのおかげで、この若者の心は徐々に純粋になり、この世に対する客観性が芽生えたので、この世を放棄してラーマクリシュナ僧院の僧侶になりました。

夕方にベルル・マトの客間で聖典の授業が行われることになりました。ときどきスワーミー・プレーマーナンダも参加することがありました。ある時、聖典の授業の時間にプレーマーナンダジーが客間に行くと、部屋は暗く、誰もいませんでした。彼は当然怒りました。彼は見習い僧たちを呼んで、なぜ欠席したのかを尋ねると、見習い僧の一人が、「在家信者がよくこの部屋に来て寝ています。だからそこで授業をするのが難しいと感じています」と言いました。するとスワーミー・プレーマーナンダジーは、「在家の信者たちは何百もの問題に悩まされています。彼らはこの神聖な雰囲気の中で悩みや問題を忘れ、眠りにつくことができるだから寝かせてあげなさい。しかし、あなた方は人々を無知の眠りから目覚めさせるためにこの世を放棄したのでしょう。あなたたちが起きているのを見て、彼らは起き上がるでしょう」と言いました。

プレーマーナンダジーは、新しく加わった僧侶の人格形成において重要な役割を果たしました。ある時彼は救援活動をしていた見習い僧に指示書を送りました。

1.　よほどの緊急でない限り、会話を控えてください。

2.　静かにしていられない場合は、バガヴァッド・ギーターかスワーミージーの詩の一節を声に出して読んでください。

3.　常に良い考えと行動を心がけてください。

4.　肉欲、怒り、貪欲は地獄への道です。ですから絶対に避けてください。

5.　身の丈に応じて慈善活動に寄付してください。

6.　注目されることを望まず、他人の後ろで黙って働くことができる人は、本物のカルマ・ヨーギーです。認められないと働けない人は、そうではありません。

7.　病気でない限り、どんな食べ物もまずいと考えるべきではありません。何年も美味しいものを食べる習慣をつけ続けると、素朴なものを食べることができなくなります。

8.　何年にも渡ってお金持ちから寄付された高級寝具や衣服を使うと、それに慣れてしまいます。注意してください。

9.　病気のときは他人からお世話してもらっても、健康なときはそうしないように注意してください。

10.　機会があればいつでも他の人に奉仕してください。幸運にもあなたはスワーミー・ヴィヴェーカーナンダが説いた奉仕としての宗教を受け継いでいます。

プレーマーナンダジーの言葉

・　誰もがタクールの子供であることを知り、万人を自分自身と見てください。すべての人に愛を与え、見返りを求めずに自分が持っているものは何でも与えてください。

・　心は常に何かに取り組んでいる必要があります。ですので、神への思いと神の信者への奉仕に携わっていなさい。これがサーダナ、タパッスヤー、ヨーガです。あなた方皆がこの神の愛に酔いしれますように。

・　「私」や「私のもの」という考えをすべて捨ててください。このちっぽけで狭い心の考え方をすべて捨て去ったとき、ハートから本物の霊性が目覚め、神聖な至福を味わうでしょう。

•　私たちの本性は愛することです。他者の強さや欠点をみてから人を愛することではありません。

•　愛によってこの世界全体を自分のものになさい。敵方も敵も存在しません。全世界が愛によって一つになりますように。

•　あなたの人生を神殿にしてください。純粋さと愛をあなたのモットーとしなさい。

何度もプレーマーナンダジーは、瞑想をすることやシュリー・ ラーマクリシュナが説いた「私ではありません、あなたです（ナーハム　トゥフー）」という考えを見習い僧や信者の心に沁みこませようと、努めました。低次の「私」がすべての問題の根本原因です。彼は信者たちに、「私の家、私の家族、私の子供たちではなく、あなたの家、あなたの家族、あなたの子供たちです」と言いました。

かつて、ある信者が彼に、「マハーラージ、シュリー・ラーマクリシュナはあなたを偉大になさいました！」と言ったときのことです。彼は言いました、「いいえ、シュリー・ラーマクリシュナは私たちを偉大になさったのではありません。師は私たちを何者でもない存在になさいました。あなたも何者でもない者にならなければなりません。心からすべての虚栄心を追い出しなさい。師はよく、エゴがなくなると、すべての問題はなくなる、とおっしゃいました」。

名前がプレーマーナンダであるように、彼は実際に愛の権化でした。彼はしばしば僧団の母と呼ばれました。彼は常に、「本当の偉大さは低次の自我を殺し、私たちの心の中にある神聖な愛を目覚めさせることにある」という考えを人びとの心に植え付けようとしていました。

宝石の価値は宝石商だけが分かる、と言われます。同様に、シュリー・ラーマクリシュナの出家直弟子たちは、お互いがどれほど偉大かを理解していました。かつて、長い間会わなかった後に、トゥーリヤーナンダジーがプレーマーナンダジーに会ったとき、プレーマーナンダジーにひれ伏してこう言いました、「兄弟よ、謙虚さという点ではあなたに勝るものはいません！」。ある時、ブラフマーナンダジーの前でプレーマーナンダジーは「兄弟よ、このゲルア（出家僧の着物）を脱ぎましょう。それは私たちが僧侶だと宣伝しているようなものです！」と言いました。彼は伝統的なゲルアでさえ虚栄心を消す障害になる、という気持ちだったのです。

プレーマーナンダジーが講演者として講義を行っていた時のことです。話の途中で、聴衆の一人が立ち上がって、「マハーラージ、神聖な愛（プレーマー）について何か教えてください」と言いました。マハーラージは話を続けました。するとその人はまた同じことを言ったので今度は、プレーマーナンダジーは少し興奮して「残念ながら、あなた方の中に神聖な愛を持つのに適した人は一人もいません。神聖な愛を得るためには、あなたの頭を捧げなければなりません。頭とは、「私」と「私のもの」のことです」。それを聞いてその人は黙り込みました。

以上、プレーマーナンダジーの純粋な愛についてみてきました。ミツバチが蜜の魅力に惹かれて四方八方からやって来るように、何百人もの若者が彼の愛の魔法に惹かれてベルル・マトにやって来ました。彼らの多くは僧侶になり、シュリー・・ラーマクリシュナへの奉仕に生涯を捧げました。彼の魔法の一振れで、無信仰者は敬虔な信者となり、罪人は清められ、一般の人は素晴らしい人になりました。この偉大な魂に、愛情を込めてご挨拶申し上げます。